パラソルギャラリー 2013

青空のもと 手作りアートめぐり

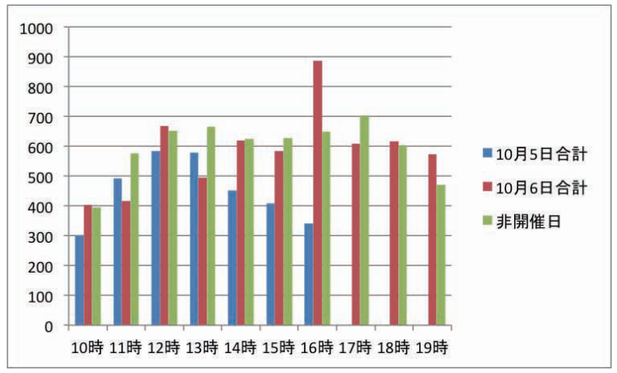
主催：パラソルギャラリー実行委員会　後援：千葉市都市局都市部まちづくり推進課　協力：（株）三越伊勢丹、三越千葉店、千葉大学

協賛：千葉駅前大通り景観形成推進協議会、千葉市都市部親睦会千葉市風月会、千葉市葉基会、千葉市風月会、千葉市住宅供給公社、千葉市職員労働組合

概要

－開催日
10 月 5 日（土）10:00-17:00（雨天の為夜パラ中止）
10 月 6 日（日）10:00-20:00
－開催状況
2 日間合計 9028 人
出展者数 2 日間 70 組
－同時開催
土曜日　千夜市夜　ベイサイドジャズ
日曜日　千夜市夜　アースデイマーケットちば

－その他
※10 月 5 日（土）11:00-17:00 千葉三越前にてオープンカフェを実施の予定だったが雨のため中止。
※キャンドル作りの企画のため、NTT 千葉内の一部の敷地及び電力を利用ご協力を頂いた。
※一部敷地が工事中であったため、開催前日含め 3 日間工事休止のご協力を頂いた。



5 日土曜日は雨のため来場者は伸びなかったが、6 日は天候にも恵まれ、昼の時間帯は非開催日と比べても大幅に来場して頂いた。また、17 時以降も来場者が多かった。これは夜の音楽会、パラソルのライトアップ、出展者等「非日常感」の影響が足を運んでくれる要因であると考えられる。

収支報告 / 義援金

（収入の部）

項目	金額	備考
協賛金	¥ 250,000	5団体及び企業
パラソルギャラリー出展料	¥ 187,500	1,500円×（63＋62）本
パラソルギャラリー展示台料	¥ 73,000	1,000円×（63＋10）台
パラソルギャラリー駐車場代	¥ 34,000	500円×（34＋34）台
Tシャツ代	¥ 44,000	
千葉市補助金	¥ 120,000	
ポストカード代	¥ 13,200	
前年度繰り越し金	¥ 385,998	
預金利息	¥ 44	
弁当販売代	¥ 1,000	
合計	¥ 1,108,742	

（支出の部）

事業名	事業経費	金額
パラソルギャラリー経費	電気工事代	¥ 63,315
	パラソル代	¥ 104,700
	資材搬出入経費	¥ 108,780
	夜間警備費	¥ 69,300
	飲み物、弁当代	¥ 30,054
	キャンドル材料	¥ 16,641
	ポスター、リーフレット代	¥ 30,875
	資料送付代	¥ 38,000
	レンタカー、ガソリン代	¥ 18,893
	会場設営用備品代	¥ 27,188
	賠償責任保険料	¥ 17,260
	傷害保険料	¥ 3,672
	ポストカード代	¥ 5,743
	Tシャツ代	¥ 68,390
	ランタン代	¥ 17,178
	みんなの声材料	¥14,532
	その他経費	¥ 25,798
合計		¥ 660,319
	繰越金	¥ 448,423

来場者	¥ 4,738
出展者	¥ 37,202
合計	¥ 41,940

千葉駅前大通り景観形成推進協議会を始め計 250,000 円の協賛金と千葉市からの補助金 120,000 円を頂き、開催することができた。また 2013 年から、希望する市民から T シャツ代や弁当代を初めて頂く様になった。

支出は 2012 年とほぼ内容は変わらないが、搬出入に使用するトラックを同時開催する千夜市夜からお借りして、経費を削減した。また、夜パラの電気工事を一部の区間のみにして、非工事区間を 100 円ランタンで代用して夜パラに掛かるトータルコストの絶対額を抑えた。広報に関しては記事として取りあげて頂いたり、ご紹介を頂く等してコストを掛けずに行った。パラソルギャラリーの認知度を上げるためになるべくコストを掛けずに広報する手段を検討していく必要性がある。

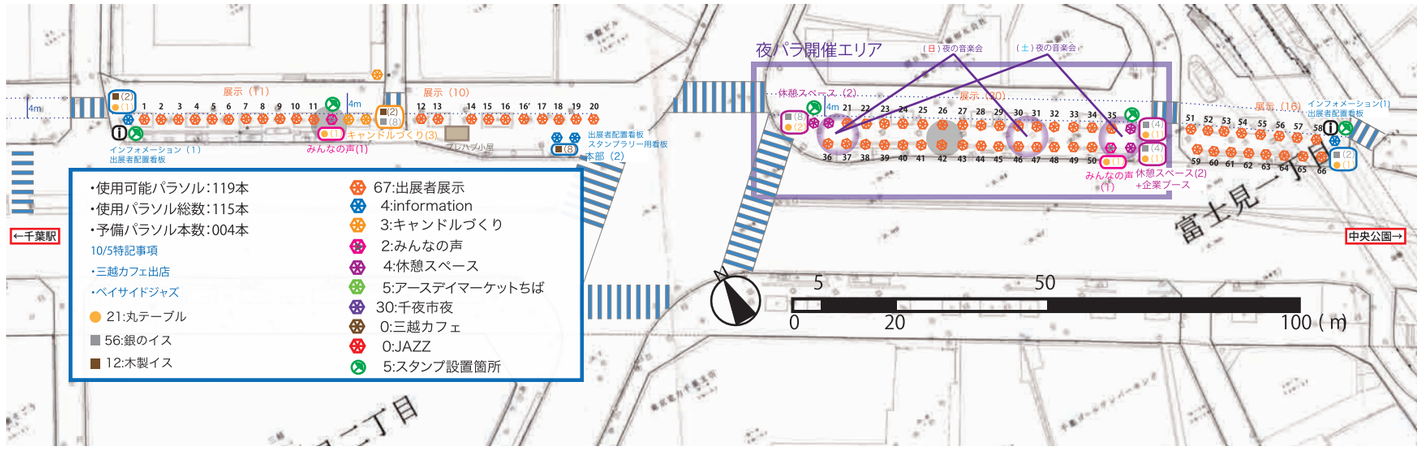
今後のパラソルギャラリー開催に当たって、千葉市からの補助金が無くなっても開催できる様に、収支、支出の両面から検討していく必要がある。

義捐金は来場者の方々から 4,738 円、出展者の方々から 37,202 円、計 40,848 円集まり、香取市と旭市に半分ずつ送付。

ご協力有難うございました。

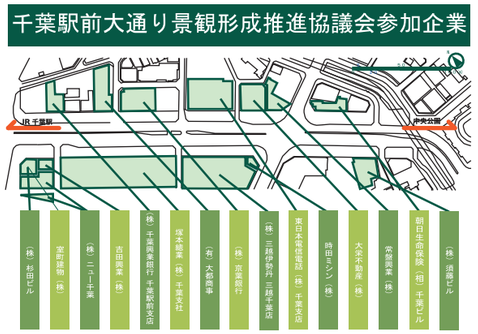
配置計画

2012 年よりも出展スペースを縮め、密度濃く出展者を配置。連続感と賑わいを創出することができた。



2013/10/5-6 10:00-20:00

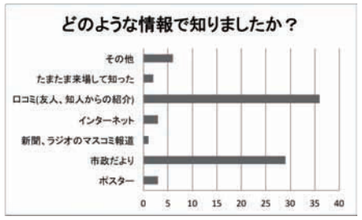
千葉駅前大通り景観形成推進協議会

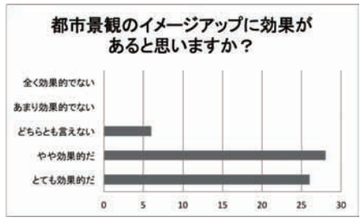


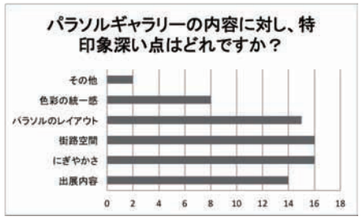
▲協議会ブースの様子

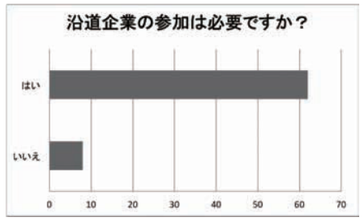
2013 年も千葉駅前大通り景観形成推進協議会に協賛して頂き、パラソルギャラリー 2013 開催を手伝って頂いた。 千葉駅前大通り景観形成推進協議会は「誰からも愛される」「親しみのある」駅前大通りの形成を目指して活動している。 2013 年度では協議会のパンフレットとポスターを作成し、パラソルギャラリー当日に設けた協議会ブースにて PR を行った。 右記のグラフから分かる様に 2012 年と同様に多くの出展者や来場者はパラソルギャラリー当日に周辺企業の参加を求めていることが分かった。 また参加の仕方として企業の特徴を活かしたコーナーや販売を期待している結果が出た。 今後とも更にイベント自体が盛り上がる手段の一つとして周辺企業の参加の仕方を考えていきたい。

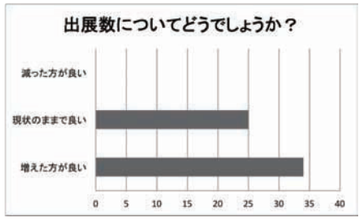
来場者アンケート

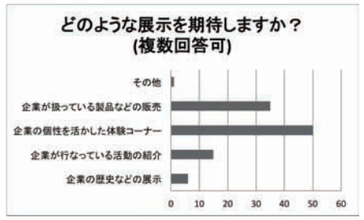




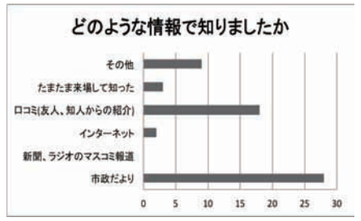


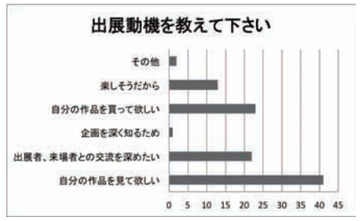


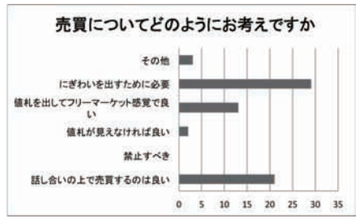




出展者アンケート







来場者のアンケートより、 パラソルギャラリーが千葉駅前大通りの景観形成に寄与していることが分かった。 来場者はパラソルが直線上に並んでいるレイアウトであったり、 出展者及び出展物が醸し出す「賑やかさ」が印象に残していることが分かった。 更に来場者はパラソルギャラリーの出展規模の拡大を大多数が希望していることが分かったので、 2014 年以降は更なる出展規模拡大も視野に入れて行く必要がある。

出展者のアンケートより、 出展者はパラソルギャラリーを自分の趣味を外へ発信する場として捉えていることが分かった。 また、出展者同士での交流も伺え、 今後は出展者が交流できる場も創出することによって、出展者の出展意欲拡大に繋がっていくと考えられる。 売買を許可して 2 年目になるが禁止すべきという結果は出て来なかった。これは出展者がパラソルギャラリーの趣旨を掴み実行している為であると考えられる。今後も趣旨理解の場をきちんと設ける必要がある。

スタンプラリー

パラソルギャラリー内に設置した 5 カ所のスタンプ台でスタンプを集めてもらい、 本部で引換券と交換。 来場者は希望する出展者に赴き、 景品と交換を実施。 出展者には 5 つ以上の景品を用意してもらい、無くなり次第景品交換を終了。 来場者からは「希望する出展者の景品がなかった」「どの出展者の景品が残っているか分からない」などといった声が挙がった。

景品数が 352 に対して 272 の景品交換が行われた。 5 日が天候に恵まれなかったため、 予想より下回ったと考えられる。

みんなの声

2012 年まで、 フォトメッセージとして使用していた板版を利用して 2013 年は「みんなの声」を実施。 出展者や来場者に突撃して、「意気込み」「感想」を伺い、 写真とコメントを頂いた。 目標数 150 に対して出展者から 47、 来場者から 68 の「声」が掲示された。 当日学生スタッフからも「写真をコミュニケーションツールとして使うのは楽しかった。」「出展者に話を聞く事ができたので楽しかった。」という意見が挙がった。 一方で配置の動線計画や企画の意味付けなど検討課題も抽出された。

キャンドル作り

NTT 千葉さんのご協力のもと 2 日間に渡ってキャンドル作りを実施 (10:00-17:00)。来場者の方に 2 日間で計 70 人にキャンドル体験を行ってもらった。 キャンドル作りは主に子供連れの親子で反響があり、 パラソルギャラリーにおいて子供達が楽しめる空間として彩っていた。 2014 年以降も実施で検討予定であるが、 キャンドル作成時に所用する時間が長くなってしまうこと、 キャンドル作りマニュアルを当日スタッフが円滑に理解するための工夫等の課題が残されている。

夜パラ

2012 年に引き続き 17 時～20 時の時間帯を「夜パラ」として位置付け、 パラソルのライトアップを実施した。 2012 年はパラソルギャラリー全体で電気工事を行いライトアップしたが、 2013 年は夜パラの出展エリアのみを工事を行い、 他エリアは 100 円ライトを使用した。 工事費を抑えることはできたが、 工事エリアと非工事エリアが混在したため、 駅～中央公園までの連続感が薄れてしまった。 今後もライトアップ方法や提灯、 行灯、 アートとの組み合わせの可能性について検討していく必要がある。

夜の音楽会

夜パラの開催時間を利用して市民や学生が演奏する夜の音楽会を実施した。 2012 年時では電源の利用を禁止したが、 2013 年では使用可能を謳い、 幅広く演奏者を募集した。 電源を使用したが夜間の静寂した雰囲気の規模に合った演奏を実施してもらい、 パラソルギャラリーの雰囲気を損なうことは無かった。 反省点としては、夜パラの出展エリアの両サイドで音楽会を実施したため、 来場者の動線を分断してしまったため、 2014 年以降は検討していく必要がある。

同時開催

2012 年に引き続き、 BAY SIDE JAZZ、千夜市夜、 アースデイマーケットちばと同時開催を実施した。 2013 年は千夜市夜が 2 日間に渡って初めて開催したため、パラソルギャラリー単体開催と比べて、 賑わい創出に相乗効果が生まれていたと考えられる。 また、 準備時に協力体制を組んだり、 備品の共有等も行い、 賑わい創出以外の面でも、 同時開催のメリットを生み出すことができた。 2014 年以降同時開催を実施する場合は、広報やデザインコードの共有を行うことが必要である。